小学校体育におけるハンドボールの「捕」の指導法に関する事例研究

佐々木尚哉(1511035)

≪序論≫

○ 研究動機・目的・方法

筆者は高校の３年間と大学の４年間で計７年間ハンドボールに関わり、いつのまにか捕る運動ができるようになっていた。そして、この７年間で、小学校の中・高学年と高校のハンドボール未経験者の捕る運動の上達過程に類似しているのではないかと感じた。捕るという運動はハンドボールの中でも基礎となる重要な運動である。そこで、将来指導者として捕る運動ができない子供に対してどのように指導をしていけばいいのか。そして、どのような知識を持っていなければならないのか。これから適切な指導・助言をするために子どもの「捕」の運動がどのように発達していくのかを把握したいと感じたのが本研究の動機である。したがって、本研究の目的は、ボール運動の「捕」に注目して、小学校低・高学年の子どもたちがどのような動き方をするのかを把握し、技能を向上させていくためにどのような指導をしているのかを明らかにしていくことである。本研究の方法は、運動伝承論の立場から、小学校低・高学年の子供（A 県附属小学校５年生、M 小学校５年生、I 小学校３年生）を対象として、ボール運動の授業をビデオに撮り、関与観察を通して子どもたちの動き方を把握する。その際、子どもの運動問題をどのように発見し、どのような指導で子どもの技能を向上させているのかという教師の促発能力を分析していくという方法を用いていく。

≪本論≫

○ 事例研究・促発能力について

事例研究とは、「ある具体的な事例について、それを詳しく調べ、分析・研究して、その背後にある原理や法則性などを究明し一般的な法則・理論を発見しようとする方法」である。

まず、「促発能力」というのは、指導者側の能力であり、「促発」というのは、「承け手の運動感覚能力の図式化を促して形態発生させること」である。つまり、「運動発生の指導において、その生徒の動く感じをわかりやすく伝え、コツを身につけさせ得る」ということである。指導者は、自ら運動を生み出すのではなく、承け手が自らの運動感覚を図式化できるように、その自得発生を促す責任があり、さらに、承け手の運動感覚世界に共に住み込んで、運動感覚交信できることが重要となる。したがって、これまで一般に理解されているように、マネジメントを得意とする教師やコーチが運動学習を外から激励し、叱咤する意味の指導力とは一線を画することになる。「促発能力」には観察能力、交信能力、代行能力、処方能力の四つがあり、観察・交信・代行を経て、処方へと帰結する。

他者を理解でき、そこに運動感覚の交信が成立して、運動の伝承が成立してきたのは、「私の体に」与えられる運動感覚がまったく同様に、他者の私的な運動感覚身体にも出現するからである。筆者は、このことを、日常的な経験的事実からよく知られているように、「コツを身に付ける」と考える。

○ ハンドボールの「捕」の指導における事例研究

ハンドボール指導における事例を分析していく上で、特にエピソード記述を用いていく。このエピソード記述では、事態の流れが明瞭に描きだされ、それについておおよそ対象者と共通理解に達することができる。このようにエピソード記述を用いることでわかりやすく分析できるのではないかと考えた。

いくつかの事例のなかで、処方能力を用いた指導方法をまとめると以下のとおりである。

指導方法（処方能力）	結果
１、「キャッチの構え」	低いボールが来たときにも、指を上に向けてキャッチしようとしている子供たちに対して、指を下に向けてすると捕りやすいということを指導している。低いボールを捕ることができるようになった。
２、「１・２キャッチ」	「１！２！」というリズムを中心にして捕る動きのコツを促している。このボールを捕るという動きは「１！」で投げて、「２！」でキャッチというリズムに乗って、運動修正に取り組ませることができた。
３、「正面キャッチ」	横にそれたボールを上手くキャッチすることのできない子どもたちに対して、正面に入って捕ることを意識させる。しかし、意識として頭にはあったとしても、いざ、体を動かしてやってみるというのは別の問題のようにも思えた。

≪結論≫

本研究では、教師の促発能力の発揮という運動伝承論の視点から、小学校におけるハンドボールの指導場面の典型的な事例を三つ取り上げ、関与観察した。

教師は、一般的な運動発達を把握したうえで、実際の対象となる子どもたちを観察し、運動問題を瞬時に見抜いて、この運動の問題点を見極めながらその子どもに応じた指導をする必要がある。また、多くの子どもたちに一斉指導する際にも、実際の子どもたちに即した教材づくりや共通理解することができる言葉がけなど、子どもたちの情況に応じた指導が必要である。このように教師が子どもたちに指導していくにあたって、促発能力は教師に不可欠であり、指導場面に応じて使い分けなければならないのである。

（引用・参考文献省略）